

【内閣総理大臣賞、農林水産大臣賞】

特定非営利活動法人 ゆうきハートネット（岐阜県加茂郡白川町）
～人と里をハートでつなぐむらづくり～

1 むらづくりの内容及び成果

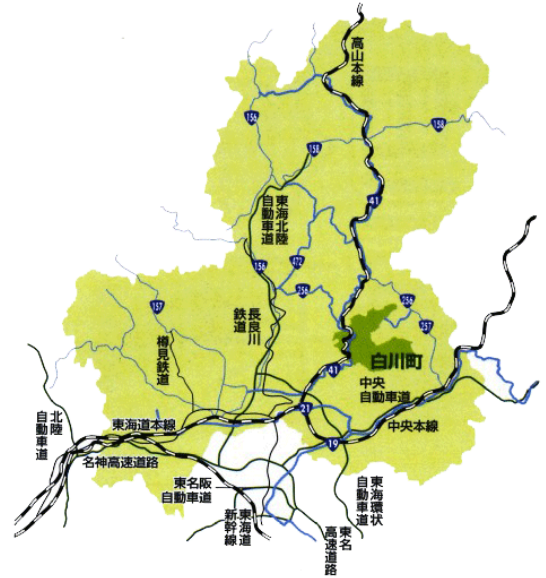
(1) 地域の沿革と概要

白川町は、岐阜県の東部に位置する「山間農業地域」であり、総面積の 88%を山林が占めている。また、65 歳以上の人口割合が 43%と、高齢化が進んでいる。

町の主要産業は農業と林業で、農業については、高級茶である「白川茶」に加え、近年、寒暖差が大きい山間地域の特徴を生かし、夏秋トマトの生産に取り組んでいる。林業については、優良財「東濃桜」が特産品となっている。

農業についてみると、町内の農地面積は 731ha(町面積の 3.1%)で、うち田が 463ha、畑が 50ha、樹園地が 218haである。

田については 76%で農地整備が完了し、営農組合も設立されるなど、大型機械による農業生産の合理化も漸次進んでいる。



(2) むらづくりの動機、背景

平成 10 年に 10 名の農業者が、有機農業の生産技術の研さんを目的として任意団体「ゆうきハートネット」を立ち上げ、稲作を主体として有機農業に本格的に取り組み始めた。その後、平成 18 年、「有機農業の推進に関する法律」が施行され、有機農業に対する社会的な関心が次第に高まる中、平成 21 年、ゆうきハートネットと白川町が中心となって、「白川町有機の里づくり協議会」を立ち上げ、同年、国の「地域有機農業推進事業（モデルタウン事業）」に採択されたことにより、町を挙げて、環境への負荷をできる限り低減した農業を推進することとなった。



農業研修交流施設「黒川 Maruke」

平成 23 年に法人化し、有機農業研修施設「くわ山結びの家」を設置するなど、新規就農者の育成や移住者の受入を通じて地域振興を図る体制を整備した。

また、平成 30 年 4 月に町が整備した農業研修交流施設「黒川 Maruke」では、3 名の研修生を受け入れるとともに、地域の情報交流の場として活動を拡充している。

(3) むらづくりの推進体制

ア ゆうきハートネットの組織体制、会員の状況

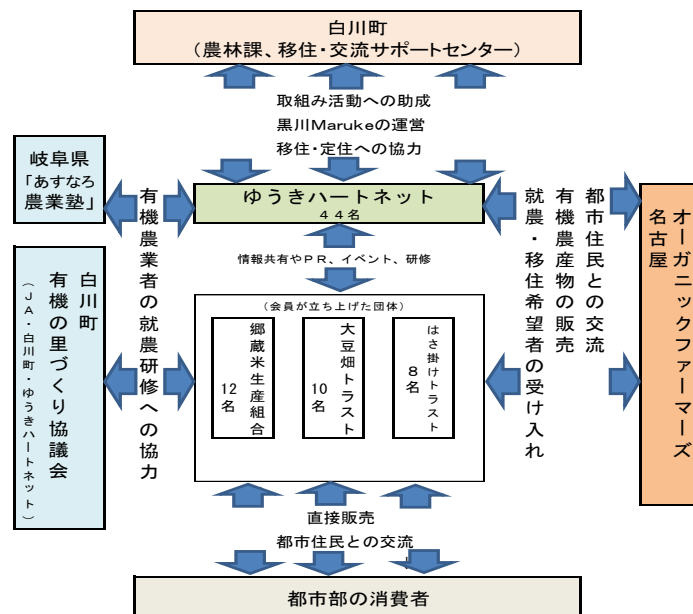
ゆうきハートネットの会員は、平成 30 年 5 月現在、44 名（うち白川町在住者 35 名）であり、理事長を含めた 6 名の理事と 2 名の監事の下で運営されている。

理事 6 名は、民生委員、農業委員等の役員も兼ねている場合が多く、ゆうきハートネットの活動はこれらの者を通じ、会員以外の地域住民にも情報提供等が行われている。

イ ゆうきハートネットと連携してむらづくりを行う行政機関及び団体との関係

ゆうきハートネットは、「生産技術、経営面での技術向上のための事業」、「消費者との交流などで農業への理解を深めるための事業」、「新規就農者の参入促進と町内定住を支援する事業」、「有機農産物の販売促進事業」の 4 つの事業を行っており、各事業では関係団体と連携し取り組んでいる。

具体的な連携は以下のとおりである。



① 行政機関（県、町）・J Aとの連携

○ 岐阜県との連携

ゆうきハートネットの会員3名が、岐阜県の「あすなる農業塾」制度に塾長として登録され、就農希望者の研修を積極的に受け入れている。

※あすなる農業塾

就農希望者が農業経営に必要な技術・知識及び経営管理等について円滑に学ぶことができるよう、県に登録された指導者（あすなる農業塾長）の下で研修を受けられる、岐阜県独自の制度

○ 白川町・J Aとの連携

町は、ゆうきハートネットが行う研修会等の活動補助のほか、ゆうきハートネット及び「白川町有機の里づくり協議会」が実施する国の事業の窓口としても支援を行っている。

町が、就農者の研修や地区での話し合い、都市農村交流等の施設として整備した農業研修交流施設「黒川 Maruke」を、ゆうきハートネットと連携して運営しており、研修生の宿泊施設としても活用されている。

また、町では「移住・交流サポートセンター」を設置し、移住者に対して、住宅の新築、中古住宅の購入・リフォームに対する補助、農地付空き家の農地の取得の下限面積を1aに設定するなどの措置も行っている。ゆうきハートネットはこのような町の施策とも連携して移住支援を行っている。

J Aは、「白川町有機の里づくり協議会」の一員として参画することにより、ゆうきハートネット及び白川町と連携している。

② 生産組織との連携

郷蔵米生産組合は、平成元年から、名古屋市内の消費者グループと提携して有機農業での水稻栽培を行っている組織であり、有機農業での新規就農者の販路確保としての役割も果たしている。

また、消費者との交流イベントを開催するほか、新たに消費者に出資を募り、作業に参加するとともに、収穫した玄米を受け取る「たんぼオーナー制度」の取組を始めている。

③ 消費者との連携

○ 「オーガニックファーマーズ名古屋」との連携

オーガニックファーマーズ名古屋は、毎週土曜日午前中に名古屋市中心部のオアシス21で、有機農業で作られた農産物を販売する「オーガニックファーマーズ朝市村」を開催しており、ゆうきハートネット会員12名が朝市村に出店している。



オーガニックファーマーズ朝市村

また、オーガニックファーマーズ朝市村では、有機農業を始めたいという人からの相談窓口を開設している。ゆうきハートネットはこの窓口と連携して就農・移住希望者を受け入れている。

○ 「流域自給をつくる大豆畑トラスト」との連携

流域自給をつくる大豆畑トラストは、消費者に5坪単位で畑への出資を募り、生産者(ゆうきハートネットの会員)と共有して大豆を販売している。郷蔵米生産組合と同様、新規就農者の販路の1つとなっている。

また、夏祭りを開催するなど、消費者との交流にも取り組んでいる。

○ 「はさ掛けトラスト」との連携

はさ掛けトラストは、消費者にはさ掛け米を20kg単位で出資を募り、田植えや草取り、稲刈り・はさ掛けなどの作業を消費者会員の参加イベントとして実施している。



はさ掛けトラストのイベント

はさ掛けトラストで作られたわらは、「ストローベイルハウス」(わらのブロックを積み上げ、その表面に土を塗り重ねて作られる家)の建築に使用されている。

(4) むらづくりの農林漁業生産面への寄与状況

ア 有機農業及び有機農産物の生産販売の取組

① 会員における取組事例

会員の中には、もみがらと落ち葉でたい肥を生産販売するとともに、有機培養土づくりに取り組んでいる者もいる。さらには、後継者のいない棚田を借り受けて有機農業を行っている者もあり、地域景観の維持や農地の荒廃防止に寄与している。

② 有機農産物の生産販売の取組

有機農産物を生産・販売する場合、販売先の確保が課題となるが、ゆうきハートネットでは、郷蔵米生産組合や大豆畑トラスト等と連携して、米や大豆を消費者へ直接契約販売を行っているほか、オーガニックファーマーズ朝市村での販売等を通じて、会員の経営安定にもつなげて者もいる。



新たな提携先で販売されるトマト

さらに、平成29年度からは、有機農産物を取り扱うスーパーとの提携を開始するなど、新たな販路の拡大にも力を入れ、会員の所得向上と経営安定化に取り組んでいる。

イ 技術向上、水稻における有機農業及び環境保全型農業の取組

① 技術向上の取組

ゆうきハートネットは、農学者や有機農業等の実践者を招いた講演会・研修会の開催や、先進地の視察を行うほか、共同作業等の技術向上の取組により、会員の技術向上のみならず、新規就農者の技術取得にも寄与している。

② 水稻における有機農業の取組

全国的にみると、有機農業の取組面積は耕地面積の1%に満たないが、白川町の水稻における有機栽培の面積は5.3%と、有機農業の面積割合が高い。

③ 環境保全型農業の取組

ゆうきハートネットでは、環境保全型農業の取組についても積極的に取り

組んでおり、平成 29 年度には会員 17 名（約 10h a）が「環境保全型農業直接支払交付金」を活用している。

ウ 就農・移住者の受入、就農希望者への研修、女性の活躍等

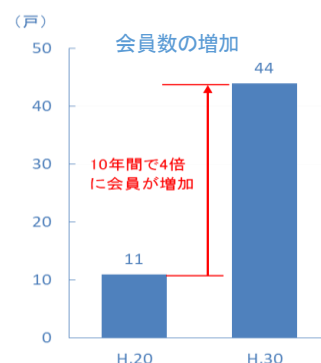
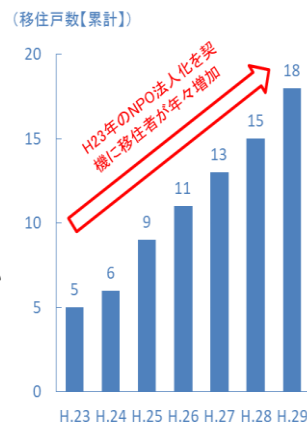
① 就農・移住者の受入

ゆうきハートネットは、有機農業を目指す若者と地域を結ぶコーディネーター役となり、法人化した平成 23 年からの 7 年間で、18 戸 50 名の就農（移住）者を受け入れ、今日まですべての移住者が地域に定着して農業に従事している。

その結果、ゆうきハートネットの会員数は平成 20 年からの 10 年間で 4 倍に増加した。移住者は会員の 4 割を占め、移住者の 7 割が 30 代と若い世代である。

有機農業での就農を希望する人にとって、対応できる相談窓口や就農時の支援体制の整ったところが少ない中、町ではゆうきハートネットにより、有機農業での就農希望者を受け入れる体制が整えられている。

また、オーガニックファーマーズ朝市村で就農相談のほか、県の就農相談会等にも参加し、有機農業希望者の相談に応えている。



② 就農希望者への研修

「あすなる農業塾」での就農希望者を積極的に受け入れており、平成 23 年からの 7 年間で 10 名が研修に参加している。

また、研修生は有機農業研修施設「くわ山結びの家」を拠点として、ゆうきハートネット会員を講師とし、就農に必要な技術を学ぶことができる。「くわ山結びの家」では、平成 23 年からの 7 年間で 20 名の研修生を受け入れている。

③ 女性の活躍

はさ掛け米を消費者に届ける（「はさ掛けトラスト」）取組は、移住した女性によって発案され、田植、稲刈体験イベントも夫婦で協力しながら実施している。また、夫婦で新規就農し、4,000 本の原木シイタケを栽培するほか、有機栽培で米、野菜づくりに取り組む女性や、公民館や自宅で料理教室を開き、

農家レストランとして料理の提供も始めた女性など、多くの女性が、有機農業の発展、都市住民との交流、地域の活性化に大きく寄与している。

(5) むらづくりの生活・環境整備面への寄与状況

ア 就農希望者への生活サポートの取組

ゆうきハートネットでは、就農希望者の就農・移住全般についてサポートしており、ゆうきハートネットで把握している農地や住居の情報をIターン就農希望者へ提供するとともに、賃貸交渉や隣家へのあいさつなどもゆうきハートネット会員が一緒に行っている。

また、就農直後の収入が少ない時期の現金収入確保のために、地元の養豚場や福祉施設などでのアルバイトを紹介するなど、きめ細やかな支援を行っている。

イ 都市住民との交流活動

郷蔵米生産組合や大豆畑トラスト、はさ掛けトラストなどと連携し、田植えや稲刈りなどの消費者交流イベントを開催している。

また、米作り作業体験プログラムや、参加者が野菜の栽培・収穫をし、調理して食べる食育プロジェクトを行っている会員や、担い手のいなくなった棚田を借り受け、棚田を保全しながら手押し機械と手作業による棚田農作業体験イベントを行っている会員もおり、活発な都市農村交流が行われている。

なお、平成29年度から名古屋のスーパーと連携して子どもたちの農業体験を実施し、食農教育にも貢献している。

ウ Iターン者の地域への貢献

ゆうきハートネットは、就農・移住希望者に対する支援体制を構築しているため、若手移住者はスムーズに地域に溶け込むことができ、全ての移住世帯が消防団に加入し、地域の伝統文化である地歌舞伎にも参加するなど、地域活動にも積極的に取り組んでいる。



地歌舞伎(東座)での公演

移住者は家族を伴って移住することが多く、白川町にやってきた移住者夫婦は、自分らしい農業や生活の実現を目指して活動し、地域の中で欠くことのできない存在となっている。

また、移住者の家族ではこれまでに14名が白川町で出生している。若い移住

者家族が地域に入り、子供のいなかった集落で子供が生まれ、集落全体で子どもを見守り育てる機運が高まり、集落の人たちが交流することで地域の活性化につながっている。

2 むらづくりの特色及び所見

近年、豊かな自然の中で、地域の人たちとぬくもりある交流をしながら自分のライフスタイルの実現を目指す、いわゆる「田園回帰」を志向する若者が増加している。

ゆうきハートネットの活動は、そのような若者たちのニーズに応え、彼らの希望するライフスタイルを実現させるためのサポートをきめ細かに行うことで若者の新規就農、定住を促し、地域の抱える高齢化や農業の担い手不足の解消、地域の活性化に大きく寄与している。

ゆうきハートネットによる取組みは、①新規就農、移住に向けた幅広い相談窓口、②充実した農業研修制度、③住宅をはじめとした生活環境整備への支援、④就農後の生活面でのサポートの4点である。

移住者は白川町でスムーズに就農し、それぞれに自分らしい農業を実践しており、農業体験や食育に取り組む人、農家カフェを開く人、インターネットでの農産物販売をする人、林業や狩猟を始めた人など、様々な活動がなされている。このような多種多様な活動は、単に個々のニーズを充足させるだけでなく、地域住民との交流を深め、新旧住民が一体となって地域の課題に向き合い、様々な生産活動や文化活動への参加を通じて、地域のあり方を日々模索しているのである。

さらに、ゆうきハートネットの支援を受けて移り住んだ就農者が自分たちの思いを受け入れてくれた地域コミュニティに感謝しつつ積極的に地域活動に参加しながら楽しく生き生きと暮らす姿を見て、新たな移住者が入ってくる。そして新たな移住者を、先の移住者が自然とサポートする好循環が生まれている。先輩移住者は、自らが新たに構築したインターネット販売や消費者との交流イベント等のノウハウを次の移住者に伝え、支援しているのである。

このように、ゆうきハートネットの活動は、有機農業をキーワードに若者たちのニーズをうまく拾い上げ、地域との橋渡しを行い、移住者の夢の実現と地域コミュニティへの貢献に結びつく全国的にも模範となる事例と考えられる。

また、平成30年4月には、「くわ山結びの家」に続く第二の有機農業研修交流施設「黒川 Maruke」が完成し、既に3名の研修生を受け入れるなど、ハード面もさらに充実したゆうきハートネットが、若い会員を迎え、ますます地域を活気づけていくことが期待されている。